

## 「チュラーロンコーン大学スプリングスクール参加報告書」

京都大学農学部2年 押村 亜沙美

私はこのプログラムに参加して、主にタイ語、タイ文化の理解に力を入れた。平日はほぼ毎日、3時間以上のタイ語の授業を受け、その他にタイの社会的背景を習う、実地研修を行うなどのタイ文化に関する学習を行った。

タイ語を日本で少し学習していったものの、タイ語授業は難しく、毎日必死に学習する必要があった。しかし、その成果もあって、食事の注文や挨拶等ができるようになった。お店などで「タオライカ?(いくらですか?)」とタイ語を使うことができた時や、タイ語で値段を言われて理解できた時はとても嬉しく感じた。

実地研修ではアユタヤ、エメラルド寺院、ムエタイ観戦に行った。現地の先生方や学生さんの詳しい説明により、タイの歴史等の背景を理解することができた。また、現地の先生方や学生さんの配慮のおかげで、快適に過ごすことができたことに感謝したいと思う。

そして、タイに来て一番驚いたことは、若者の食習慣だ。タイの家庭では、あまり母親が料理をする傾向がないことにまず驚いた。しかし、スーパーで食材の値段を見ると割と高く、作る手間が省けるという点以外にも外食に頼る背景があることが分かった。また、ファーストフードの影響からか、若者の野菜離れが進んでいると感じた。学食でも現地学生が野菜の多いメニューを頼むことが少なく、料理に付いているキュウリなどの野菜を残すことも多い。タイの伝統料理を調べてみると野菜や果物をふんだんに使った料理が多く、タイ人の野菜嫌いは現代の問題だと分かった。

今回のプログラムでは多くのチュラーロンコーン大学の学生に助けてもらう事によって、円滑にかつ楽しく終えることができた。彼らはとても日本語が上手で、かつよく日本文化を理解していた。多くの人に日本への留学経験もあり、チュラーロンコーン大学の留学システムが十分に構築されており、かつ大学生も留学への関心が高いことが分かった。この留学への関心の高さは文学部に限られるものかもしれないが、京都大学の学生も見習うべきであると思った。

チュラーロンコーン大学には複数人の日本人大学生が長期留学しており、タイという異文化の中で学べるというのは羨ましいと感じた。私は専攻の関係上、チュラーロンコーン大学に留学する可能性は低いですが、将来タイなどの東南アジアで仕事ができればいいと思った。

最後に、プログラムの企画をして下さった関係者の方々、並びに現地で私たちの世話をして下さいましたチュラーロンコーン大学の方々に感謝したいと思う。

